座談会★具象作家五人展を前にして

具象界の台風の眼に

河野通紀〈二紀会〉　松本宏〈行動美術〉
中西勝〈二紀会〉　佐藤公彦〈元町画廊〉
西村功〈二紀会〉

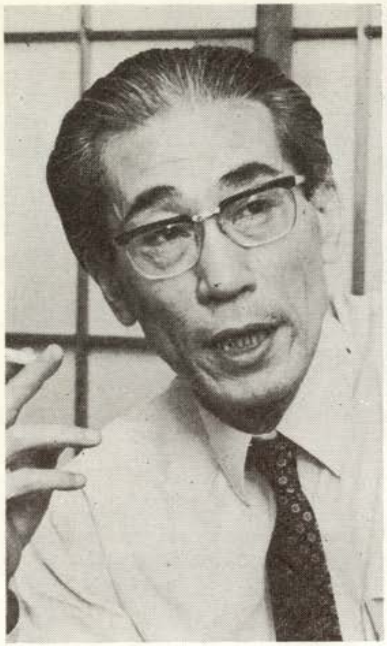
「私は油絵描きであればいいのだ，という実に素朴な考えなのです」——河野通紀氏

「人間の日常生活の中にある緊張、アイロニーというものをみつめて描きたい」——西村 功氏

★日本を背負って立つ五人の具象人間

編集部　七月六日から十五日までの十日間、元町画廊におきまして「具象人間—生命を燃焼しつづける作家—選抜五人展」が催されることになり、非常に楽しみにしている人が多いことと思います。今日はその五人展のテーマにも関係するでしょうが、日頃の美術に対する考え方と、今回の五人展への参加の意気ごみのようなものをお話していただきましょうか。

佐藤　五人展の企画は決して思いつきで考えたのではないのです。元町画廊が、大正九年からの若木屋を含めて今年で五十年を迎えるのですが、五十年というと画商の方では日本でも非常に古いわけな



「この五人がこれからの具象作家だ。日本のこれからの具象を背負って立つ具象人間だ」――佐藤公彦氏

「今度の五人展に自分がならべられると、ものすごい勝負のしどころであるわけです」――松本 宏氏

「日本人は心の中に床の間を持つべきだと思いますね」――中西 勝氏

んです。私自身、美術学校を出たりしているので、作家というものをある程度理解している。それだけに五十年を機に画廊を改装した最初の展覧会をするのには、画廊としての誇りを持った企画をたくねばならないと思ったわけです。鴨居玲、河野通紀、中西勝、西村功、松本宏の五人の作家を選んだことは、この五人展のテーマを見ていただければよく分ると思います。実はこの五人の作家にテーマをつけさせるために集まってもらって話を聞くと、その結果として関西には、この五人がこれからの具象作家だ。すなわち、日本のこれからの具象界を背負って立つのだというぐらいの意気ごみを持っている具象人間だ。ということになった。具象人間というのは、人間性が非常に忘れられていく現代に対して、人間性を大きく打ち出せる作家のことなんですね。いいかえれば、「生命を燃焼しつづける作家」ということで、その下に選抜五人展という表題がきまって作家とはかくあるべきだというほどの、展覧会としてはあまりあり得ない、作家自身に責任が重く課せられた表題になってしまった。画商としての私の経験からみてもこの頃の絵は、どちらかというと装飾性が強く、売れたらいいという絵が多くなっているが、この五人は、そういうことを抜きにして自分の個性を掘り下げてゆく作家だと、元町画廊としては自信を持って選んでいるわけです。今回の五人展は、関西の具象界の台風の眼になるのではないかと、そのぐ

らいの意気ごみで頑張っています

★五人展にかける意気

中西　四年半ほどの美術行脚というか、日本を離れてたまたま神戸に帰ってきたら、いつのまにか具象作家になる道ができていて、それが幸いにも今回の五人展に出品することで、具象作家の仲間入りができたことは非常に不思議な感じもするし、ぼくとしてもタイミングがよかったという感じもするぼく自身、他の作家たちの最近の作品は帰ってきてからほとんど見てませんので、その意味でこの五人展を自分の展覧会として、ぼくの考える具象、いわゆる生命の目安ひとつの結果としてのぼくの具象と、他の作家たちの生命を賭けて描き続けられて燃焼した結果としての具象が、どういう形で触れあい、またぼく自身に突きあたってくるかが非常に興味のあることなのですね。ただ選抜五人展となると、どうも嬉しいような恥ずかしいような……（笑）

佐藤　これは五人の侍やと思いますね。私が一番嬉しく、また期待しているのは、五人展に関してはこの五人が絶対に妥協しあわないということです。河野さんが、その代表でしょうけれど（笑）

河野　ただあるがままの自分の仕事を、こういう企画のもとに発表するだけで、この企画だからと意気ごむこともありませんね。一時は「主張せざる作家は作家にあらず」といわれたり、一方絵描きは絵を描いていたらいいんだといわれたりもしたのですが、所詮作家というのは絵を描いていたらいいんじゃないか。自分の仕事を言葉で表現するのは不可能なのですね絵描きは人間であるからには、絵画すなわち人間であるわけで、絵は人間の分身であると考えているのです。これこそ具象人間なのですね。

松本　河野さんはいわゆる頑固なひとつの哲学みたいなものを持っておられるが、ぼくはまだそういうものを持ちたくない。あっちに当り、こっちに当りで、いろいろと自分を試みて冒険をやりたいのです。その意味で今度の五人展に自分がならべられると、ものすごい勝負のしどころでもあるわけです。作品にどれだけぼくらの世代が表わせるか、またぼく自身の考えが描けるかなど、一番はりきって仕事ができる頃だと思います。

西村　ぼくの場合、今まで東京、大阪などで個展を開いてきましたが、今度、五人展というかたちで神戸で久し振りに作品の発表ができて非常に嬉しく思っています。人間というテーマに対して、今までと同じく、人間の日常生活の中にある緊張、アイロニーというものをみつめて描きたい。

松本　河野さんは惚れぬくというか、自分を信じきれるのです。ぼくはそうじゃなくて、パーッと一度に全部を出して、グループ展などで自分の位置を確かめないといけない。

河野　ぼくらも松本さんの世代を通ってきただけに、その気持はよく分りますよ。ただ、こんな席でいうとはなはだセンチメンタルになるが、松本さんの年代におけるぼくの状態はというと、男泣きに泣いたことがあります。腹がたって泣けるのですね。

★僻地との出合いが都会的なものを拭い去る

松本　中西さんは前衛の先端ともいえるニューヨークから、全く遅れた心の故郷みたいな僻地などを廻られて、先日まだ一点だけど絵を拝見しただけなのですが、何かああいった絵に大変確信を持っておられるように思えたのです。

中西　ニグロの絵ですね。まあ確信というと難しいんだけど、ぼくが神戸で日本的な生活を、それも大変忙しい生活をいっしょう懸命にやっているうちに、何ともいえない状況に陥いってしまった。それで脱出したのではないが、日本から外へ出たということにおい

て、自分をあらためて考えてみる機会が得られたのですね。神戸での前の生活でも、絵画の次元とは違った意味で人間らしく人に接してきたし、それは海外で得られた経験と同じでしょうが、ただ別の世界にいることで、ぼくは単純に興奮してしまった。食べても走っても、あらゆる意味で違った眼でみられたのですね。それで都会に行ったり田舎に行ったりしたのです。今まで、むしろ都会的なものの中に、自分も時間も何もかも物理的に埋めるということにおいて得た範囲での自然の価値の理解、感傷があったのですね。都会の中の自然、都会の中での前向きの姿勢にぼくの性格があったのです。それが僻地で受けた感銘というのは、何でチマチマとこれが健康や、自然や、前向きやと。ただ頭の中でああしろ、こうしろという条項みたいなものを粋の中で考えていたのではなかったのか。まず日本を飛びだした。そこで接した田舎との出会いが、都会的なものを拭い去って、ただ絵を描くということでそこの生活、土地と接していきたいと思ったのです。未開地などに住んでいると、立派な人だなァと思われる人に出会うことがある。後光がさしているのですね。そういう状況が後に生きてきて、ニューヨークでモダンアートを見ても、人の顔に後光がさしているようにも見えないし、言っていることも日本で知っている範囲だ。アングラの連中に会っても、魚の眼のように腐っている。まるでスモッグの下で営々と生活をしているのですね。これじゃいかん。都会的であることがどういうことか、その時自分なりに考えたのです。

松本　一カ月ほどインドの方へ行って帰りにバンコクと香港へ寄りましたが、宗教を大事にしているインドと比較すると、香港の印象は全く薄っぺらですね。人間同志の触れ合いとか、神とか土地に対する崇拝というのが、すでに都会では失なわれてきている。そういうものが、絵を描いている上でたいせつなことだと思います。

★油絵の材質を生かしたい
現代絵画と抽象画

河野　しみじみとこの頃思うのですが、私は油絵描きであればいいのだという実に素朴な考えなのです。油絵に愛着があるのですね。油絵が好きで絵描きになった。この油絵を生かすためには、油絵という材質を考えること、これは一種の描写力、記録性とかで生まれた画材なのです。その意味では現在の抽象絵画は油絵でない方がいい。これだけ科学文明が発達すれば、画材の面においても次々と新しいものが生まれている時代だから、それを取り入れたらいいので今の時代にキャンバスに油絵で抽象を描いている人ほど時代錯誤はないと思うのです。ぼくだってある時期抽象をやりましたが、人間である以上抽象的なものを吐きだしたい時もあるのです。けれども究極的には好きな油絵の材質を生かすとなると、現在の私の仕事で十分だという確信を持ってきているのです。

西村　抽象とか具象とかいうのは描かれた作品というよりも、作品に対する作家の態度でしょうね。私自身は、抽象というのが向こうからやってくるので描いているのに過ぎないのであって、自分本来の作品だとは思いません。

河野　確かに作家の態度にかかっているのですね。私らの世代から三十代までの抽象の人は、科学的進歩によって生まれたことをこなす能力がない、あるいは魅力がない。しかしそれを利用せざるを得ない。非常にそこにジレンマが起こってるのではないかという気持がします。二年前に二十日間ほどのヨーロッパ旅行に出て、油絵の成立ちから現代までの流れを肌で感じとってきたが、その結論は、旅行に出る前とあまり差はなかったですね。

中西　われわれは現代の目撃者としてそれぞれが絵を描いているのですが、四十才は考える峠で、ぼくも考えましたよ。

西村　街の中で、また地球的な規模で自然というものがなくなりつつある。たとえば、アポロの成功によって、もはや月に対する詩と夢がなくなっている。そういう状況の中で、絵はポエジーでなければならないし、そのために生命を燃焼させなければならないと思いますね。

★私を育ててくれた神戸美術界いろいろ

編集部　皆さんの言われるように現代はいろんな意味で人間への志向が前向きに急旋回している時代だと思うのです。この時に、神戸のこの五人のメンバーが日本的な立場で「具象人間―生命を燃焼しつづける作家」というテーマで前向きに姿勢をおかれているのは嬉しいことです。それでは神戸というローカルの中で、美術はどういう伸び方をしたらいいのでしょうか。

佐藤　画商として、この五人なら日本のどこへ持っていっても恥ずかしくない。私は商売を離れて、この五人の言いたいことが、鑑賞者に、また他の各々の作家に浸透し理解してもらえるのが非常にありがたいですね。それが、この展覧会を開くにあたっての一番の目的なのです。

松本　佐藤さんの話を聞いていると、ごっつい仕事をせなあかんみたいな気がして……（笑）

河野　松本君にしたら無理もないでしょうけれど、ぼくらは何とも思ってない（笑）しかし神戸は画壇的にこじんまりしていますね。西宮にいるせいか第三者的に眺められます。ぼくを育てたところはぼくらの時代においては神戸しかなかった。今でこそ各都市に市展があって新人の登龍するチャンスがいくらでもあるが、昔は三越であった神戸新聞主催の兵庫県美術協会展と、大丸の兵庫県美術家連盟展というのがあって、これがライバル意識を持っていた。美術協会展というのは主力が日本画で、村上華岳さんを筆頭に天下にとどろく日本画家の有力者を結集していた。これが今から三七、八年前のことです。一方美術家連盟展は、洋画が主力で小磯良平氏を始めとして、いわゆる現在神戸画壇で活躍しているオーソドックスな世代の人が全部所属している。西宮に住んでいても神戸には育ててくれたという愛着がある。

松本　ぼくは、加古川にいて朝日新聞の小中高展覧会で金賞やら学校賞をもらったのが絵描きになった動機で、神戸は絵の方では、学校を出てからのつながりですね。

西村　私の場合、田村孝之介先生を中心とする六甲二紀研究所が、絵のスタートで、第四回二紀展に初出品しましたが、それが十八年ほど前ですね。

河野　美術協会と美術連盟が、戦時中の統制時代に合体して美術家連盟となり、それが戦後ご破算になって神戸洋画会と兵庫県美術家同盟ができ、その頃に中西さんが入ってきたわけです。

中西　大阪の美術館が心斎橋筋の精華小学校に研究所を持っていた時、終戦後そちらへ行ったら、品川裕次郎、筒井茂樹、高田卓也らが神戸から来ておって同級生だったのです。それが神戸に初めて来た時には、彼らが市民美術教室で先生をしていた。

河野　市民美術教室というのは、われわれがつくったのです。山本万司君が世話役だったが、兵庫県美術家同盟が指導機関として設置したものです。

　あの頃、神戸で製パン所につとめる今井朝路という作家が赤マントを着て元町を濶歩していたな。

西村　ぼくはあの頃は、まじめな学生の身分だったように思いますね（笑）

★ジャンジャン市場に花咲く青春

中西　品川裕次郎にしても面白いエピソードがありますね。大きな教室に衝立があり、小使い室から借りたベッドに宿泊りしている。黒板を見たら「高橋絹子、二十五日来る」と書いてある。彼女なのですね。筒井茂樹の方も、「安井曽太郎には色がない。俺は白と黒で書いているけれど色がある。どや！」という。ごっつい奴がおるなと思ってね（笑）その頃、貝原六一さんなどと、神戸洋画会になかなか入れてくれないので面白くないので新神戸洋画会をつくった。それからバベルに変わったのです。あの頃は、なんとなしに、終戦後の敗北感と荒い気性が混じって夢みたいなものがありましたね。

佐藤　その頃だね。君が省線に乗っては一杯飲んで「みなさん、絵を描きなさい！」といっていたのは（笑）

河野　ジャンジャン市場で猫の肉が金五円でね。元永定正と一緒に行って、焼酎に串カツ、これが猫の肉や。ぼくは食べなんだが、元永は食べてた（笑）チュウを飲むのに、肴がダシ雑魚ですわ（笑）飲んだ途端、加納町三丁目から阪神の三宮駅までをふらふら歩き廻ったり（笑）爆弾というヤツです

西村　中西に誘われて、ジャンジャン市場によくついて行きましたよ。あの頃の中西は将校がつける将校鞄をつけていたね（笑）

佐藤　品川裕次郎という人物は仙人みたいな生活をしていて、ある日、神戸大丸で会ったら髪を長く伸ばして後でキュッとくくり、足元は女物の下駄をはいている。とにかく変わった男です。

中西　ぼくとよく間違えられるのですよ（笑）

佐藤　中西君がある意味での表向きの放浪性があるのですが、品川君の方は陰の放浪性を持ち、神戸では珍らしい存在です。

河野　絵はうまいですよ。ちょっと器用すぎるぐらいうまい。

中西　あの男は、とうの昔に滅びてしまった生活をしているね。

★夜、昼に誘いかける
金波銀波とネオンの洪水

編集部　神戸は文化不毛の地だといわれたりもするが、この五人展はそんな考えを吹飛ばすだけのものがあると思うのです。最後に神戸への提案をお伺いしたい。

中西　久し振りに日本へ帰ってきて感じることは、くだらんことがどこに行っても多すぎるということです。人に教わったという教養は、ぼくにいわせると、できものかさぶたですよ。その教養みたいなものを一枚一枚はがしていったら本当のものがでてくる気がしますね。

松本　今度引越してアトリエを持ったのですが、そこは、中西さんが鴨子ケ原のことをいわれた身延山のまだ上で、神戸の街がさーっと見えるのです。やっぱり神戸はある意味で誘惑の多い街ですね。文化的にも、またほかの意味でも。あれを見ていると、ちょっと隠れなあかんなと思いました。

佐藤　神戸のこんな小さな街などもっとかき回したれ、という気がしないのかいな。

中西　しかし眼下に金波銀波が見えるし、夜ともなればネオンサインがまたたくし……（笑）神戸もその面では結構なんだけれど、どうも街中では遺蹟を破壊するなど心が荒いできているのですね。住居にしても、団地サイズで床の間がなくなってしまった。外国を廻ってみてしみじみと感じたのだが日本人は、心の中に床の間を持つべきだと思いますね。神戸の街を生かすことは、神戸に住んでいる人の心の持ちようですよ。

佐藤　若林忠男さんが、九年ぶりにブラジルから神戸に帰られたので、鴨居さんがこの座談会に出られなかったが、展覧会の絵の上で沈黙の闘志を燃やしているので楽しみにして下さい。

△文責・編集部▽

具象人間

*生命を燃焼しつづける作家

選抜 **五人展** 7月6日《月》⇨15日《水》
開期中無休

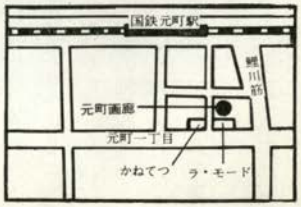
鴨居　玲／河野通紀／中西　勝／西村　功／松本　宏

主催
元町画廊

創立★★★ 50周年

元町画廊

神戸市生田区元町通1丁目　TEL 33－2359
A.M10：00－P.M7：00



Imported Drugs & Proprietaries Household & Kitchen Needs Cosmetics & Toiletries Baby Needs Greeting Cards & Wrapping Papers Stationeries Accessories Candies & Foods Books & Magazines - Toys - General Sundries-Dog & Cat Needs

AMERICAN PHARMACY

＝アメリカン・ファーマシー＝

神戸市生田区下山手通 3 丁目36

☆

STORE HOURS : 9:00—7:00 (Reg) 11:00—6:00 (Holiday)

☆

KOBE : TOR ROAD, IKUTA—KU TEL (39)1384・5224 (33)1352
(大丸1F・デュエットコーナーにもあります)
TOKYO : NIKKATSU BLD., CHIYODA—KU TEL (271)4034

EXPO'70

万国博で 一番おもしろく そして楽しいもの— それは"ラテナ マジカ"です

エキスポランド★ラテナマジカ

人が飛びだす魔法のエクリーンですよ!

＊公演時間 10·11 12·13·14·15·16·17·18·19 20·21時の12回公演 ＊所要時間 約40分
＊大人500円 学生400円 子供 200円

★チェコスロバキヤ国立劇場

1958年のブラッセル博や1967年のモントリオール博でも数百万人の人たちがラテナ マジカを見ています。アジアで初めての公演、しかもこの日本万国博でしか見られません。
またとないチャンスです。ぜひお誘い合わせの上、おいでください。

ラテナマジカ劇場

＊神戸っ子 特別割引券＊

このコーナーをご持参のかたは入場料を2割引きいたします
(1人でも・グループでも)

座談会／若きクリエーターの発言

神戸に新しい空気を

黒崎　彰〈版　画〉　河口竜夫〈立体造形〉
納　健〈彫　刻〉　新谷映子〈彫　刻〉
徳永卓磨〈油彩画〉

★宇宙と、自然と、日本の情念と

編集部　今日は、昭和十年代生まれの神戸の若きクリエーターたちに、美術において何を求めるのかまた神戸の美術界に対して何を発言するかをいろいろと聞きたいわけです。まずそれぞれの分野における作品発表の現況といったところからお話していただけませんか

河口　第十回日本国際美術展に現在出品しているのですが、それは須磨の海岸に一枚の板からとった四枚の板を並べて、それが潮の干満で浮いてくる経過を写真に撮って、二六枚のパネルにして発表したのです。これは存在の問題を扱っているので四枚の板の存在を陸と海との境界線に対置させることによって、客観的に宇宙とぼくとのかかわりあいを、そっくり展示したわけです。

徳永　今年の一月に十カ月ほどのスペイン滞在から帰ってきて、ここで一ぺん自分の作品を全部並べてみようと思って、大学時代の金沢の海岸と、神戸の街と、スペインで描いた油絵を五月に個展として発表しました。今度スペインへ行く時は永住とまではいかなくても、十年ほどでも腰をおちつけて、田舎の真白な家と真青な空、それに黄土色の土の中で、風景を描きたいですね。

黒崎　東京の銀座の画廊で個展をしたのですが、今年に入ってからの今までのシリーズではなく、「赤い闇」という全く新しいテーマなのです。ぼくの場合は、河口さんがジャンルを踏み越えて作品を出されるのに対して、版画というものに固守しているし、版画自体が非常に保守的なものであるから一層、それに固守し続けているのですね。それは版画が技術であることと、その中にオリジナル性を追求せねばならないし、また版画自体の持つ複数性による社会とのコミュニケイションがある。油絵の分野で技術が崩壊していく中で、版画ではまだまだ技術が残っているし、またそれがなければならない世界があるために版画に固守しているのです。また木版という非常に伝統的な日本的なものをしているのですが、これも伝統の崩壊というものに対する反逆的な気持があるからでしょうね。日本

新谷　映子さん

納　　健さん

徳永　卓磨さん

画の光彩を使った浮世絵的なものと、版画の複数性により大衆の土着性と風土性に入って行くことを結びつけて、新しい日本の木版画の再興の意味で、日本の伝統を新しく見直そうではないかという気持を持っているのです。今度の「赤い闇」のシリーズでは、非常にそれが強く出た作品で、赤、緑紫といった幕末絵画のようなものを神戸から東京へ運んだわけです今年は、国際版画ビエンナーレに日本代表の三六人の中に入れていただいて、この展覧会のためにもいい作品を作って発表していきたいと思っているのです。国際展の方では、ポーランドのクラコーの版画ビエンナーレ、それからパリイギリスのブラッドフォードの国際版画展に、日本の情念的なもの土着的なものを発表して、海外の評価を楽しみにしております。今年十二月の東京の国際版画ビエンナーレは、若い人たちの版画熱が盛んで昨年と異なりぐっと新人が多く、面白いものになりますよ。

納　ぼくの場合、最近は展覧会はあまりしていないのですが、本来彫刻できたのを、彫刻一本だけのジャンルに固守するのでなく、創造のあらゆるかたちを吸収する時期だと思うのです。そのためにはテレビの仕事のような社会的な、日常的な仕事の中から創造のエッセンスを取りこんでいきたいですね。現在は造型という言葉が非常にぴったりする総合的な仕事に入って大衆への道を求めることもできるのではないでしょうか。

新谷　私の場合は、渡米してから鉄の素材に興味をもちはじめました。以前からどれが私に適しているかなと、木・石・陶彫・プラスティックなど手がけてみました。そしてそれぞれの立派な感触とその質肌の自然の色彩を重んじていたのですが、最近は、鉄材に彩色の効果を試みています。彩色の効果が金属の磨かれた鋭いクールな磨き肌に対立させ、自分で溶接しています。自然の素材の色に彩色するのは邪道という意見もあるようですが、私は、質感の一層の効果をもとめて、その色のある部分をもつ形体の楽しさに魅了されています。

★ジャンルを越えて私があるのかそれとも一つの道を固守すべきか

徳永　私は美術に入る出発が、佐伯裕三のような典型的な油絵に触れてからのことですから、どうしても油絵になるのですが、これも固守しているからではなく、ただ私がなまけ者だからですわ（笑）いろいろと場所を変えては絵を描きますが、これも気に入ったところだけ描いて、開き直れば一発を当てる気持もありますね。それがたとえ駄目でも、自分にその失敗が帰るだけですから、それでいいのですよ。

河口　さきほど話しました日本国際美術展に出す作品でも、どのジャンルに入るのかは、ぼく自身は規定はしたくないのです。たまたま世界の有様を客観的に捉えたい時、ジャンルなどなくなってしまうのです。逆に黒崎さんに、版画というジャンルに固守されている理由をお聞きしたいですね。

黒崎　何か探しているうちに、その人があるジャンルの中に入ってしまっていた、というものであって、なにも木版画に固守する気でもなかったのです。たまたま、ぼく自身にひっかかっている現代の問題性を追求しているうちに、日本の庶民性というか土着性が本当の意味で美術の世界にほとばしり出たような幕末の浮世絵にあこがれたのです。日本の情念にぶつかったのが浮世絵であったことがなおも版画にしがみつかせている決定的な理由でしょうね。

河口　竜夫さん

黒崎　彰さん

納　一つの中に自分を規定して追求するのと、いろんな角度から自分を試しながら追求していって、何かが見つかるまで追いかけるのと、それぞれあるのでしょうが、それは同じことだと思いますね。

新谷　私も、ひとつにこだわらない主義ですし、ジャンルについては便宜上の分類にすぎないと思っています。ひとつのものに固定呼ばわりされて、彫刻家とか画家とか決めつけられるには抵抗があります。でも今いいましたのは、その人の説明であって自分自身は、それだけではいけない、もっと他の世界を知らなければといつもそう思っているわけです。物の出来上るピラミッド型の底辺の視覚の広さと錐形の頂点の強さに興味があるからです。

河口　ジャンルにしても素材に関しても、ぼくを規制するものは何もないですね。現代に対するかかわり方の深さによって、いろんな武器があるのであって、それがたまたま、版画とか油絵とか彫刻に行っているわけで、特に一つの素材からの脅迫観念で追いかけることはないですね。黒崎さんの場合銅版でなく木版であるのはなぜですか。

黒崎　木を素材に選ぶことが、日本の情念のようなものにつながっているのですね。素材としての木や紙、岩彩そのもの自身が、一種の情緒を持っている。板目木版というのは日本以外ではどこもできないのですよ。日本独特のものなのです。これは日本の湿度と温度に関係しているからですね。ですから、ぼくが作品をつくる前に、すでに日本が存在している。

新谷　今は、鉄材と取り組んでいますが、いつまたほかのものになるかわかりません。

　その鉄のもつ性質と個性が今は好きだからですが、学生の頃やった木版画のノミの跡に、ある種の日本的な情趣を感じ、大変気に入っていたのですが、これも今ではすでに銅版画のあの細いシャープな線に移ってきています。が、誰からも規制されない自分の世界があれば良いと思うのですが。

★日本人を越えて日本人の絵がある。それが現代の国際性だ

編集部　それぞれが国際展に出品されたり、また海外旅行の経験を持っておられますが、最近の美術が国際的な同時性を得て行く中で日本の若い世代として、日本的なものを主張することを、どうお考えでしょうか。

徳永　スペインには非常に日本人の絵描きが少なくて、自分の姿を顧りみるような目にも合わなかったのですが、私の絵の出発点になっている佐伯裕三にしても、何もパリで日本人的なものを描こうとして描いたものではない。それはパリにいて、セーヌなりの風物を前にしての情感が、結果的に日本

人的になっているのですね。ところが、スペインでもむこうで絵を描いて生活している人は、前面に強烈に日本人的というか東洋的なものをうちだしています。これには抵抗を感じましたね。そこに生活していて生まれてくる絵は、日本人意識を超えたエネルギーから出てくるもので、それが結果的に日本的体質を持っているとみられるのでしょう。

新谷　アメリカで展覧会に出品する機会があって、出品したのですが、それより、ローマ・アカデミーのエミリオ・グレコ氏の教室でデッサンしている時、私のドロウーイングを見られて「これは東洋の美しい線です。私も大変にその神秘な美しい線に興味をもっています。そして私は、イタリアの歌磨呂と呼ばれている」とある新聞記事を見せながら、とても御満悦でした。もし、私の線に東洋を感じられたとしたら、私が東洋の環境に育ったからでしょう。一年程の滞在中に感じたことですが、少くとも私は、スペイン人にもイタリア人にも、東洋的を感じさせるものを持った国民に見えましたよ。

河口　現代は外国と日本という美術の区別がなくなってきましたね。今度の日本国際美術展でも、国別は廃止されて、これはビエンナーレでもはじめての試みです。たとえば河口竜夫・ジャパンでなく神戸と書いてある。そういう意味でも、これからはどこの国の作家であるとかが分らなくなる。

黒崎　作品をつくるのは、現代への問いかけを私なりにひきだして行くからで、たまたまそれが浮世絵のテクニックとか、素材が日本的な木を使ってやっているけれどあくまでも現代と私個人との対置が問題なのです。これが今日の国際性でもあると思うのです。ただ日本人なれば、日本的な素材を相手にした時は非常に強くなることはいえるでしょうね。現代意識の発言なり個人の発言が、非常にストレートに出てくる。銅版や石版の場合、自分自身が気付かないうちに、はっきりと分らないヨーロッパ的な感覚が入ってしまったり一種のロマンチシズムやセンチメンタリズムに溺れることもあって自分の発言がストレートに出なくなると感じる時がありますね。

納　外国へ行くと非常に日本人であることを自意識させられることがあるのですね。それは当然のことなのですが、作家としてみる場合、情報化された社会での国際交流は必要な条件になると思います国際人になる中で、自分たちの住んでいる街、持っているものを生かせていけばいいし、それが作品の上に自然と出てくるのです。

新谷　自分の発言がストレートに出る素材を見い出すことも必要だけど、日本的なものの主張は形よりもっとナイーブな表現で、今おっしゃったように意識するより、例えば外地で制作する段になると自然ににじみ出てくるものだと思います。それだけに風土だの環境で出来た感覚は知らずのうち体内に入り、血と変わってゆくもののようで簡単にぬぐいとったり出来ないし、だから大切にしたいものですね。

黒崎　芸術家という名前のもつ特権的意識というか、そんなものと中身の人間との虚偽に、若い世代は気がついているのでしょうね。我々が生まれた時代に、非常にロマン派的な芸術がたくさんあって、ピラミッド型の構成の中に入ればそれで飯が食えたというシステムが既にあったが、今の若い人たちはそういう古き芸術の虚偽からくる残骸が非常に眼についてはっきり見える。だからそういうものを崩して生身の人間をだそうと思っている。生身の人間が、すなわち芸術家であることを強調するのが我々の世代でもあるといえますね。

河口　大体一つのイメージでつかまえられるのは嫌なのです。彫刻家とか版画家、油絵画家と規定されるのでなく、それではお前は一

体何なのだと絶えず問いかけられていたいのです。それでも、造型作家だとか、芸術家だとか、何とかしてトドメをさそうと思って世間がやってくるのですが、そこからいかに脱出するかが大事だと思うのですよ。

黒崎　スリルがあるからね（笑）

納　ぼくは自らいろんな物をつくって煙にまいているとこですわ。何でも屋になった時点から、自分のものがつかめそうな気がします

新谷　私も、たしかにひとつのことに固執するつもりもないし、何と呼ばれても気になりません。

★神戸には新しい空気を

編集部　最後に若き世代の立場から、神戸の美術界への注文なりをざっくばらんに話して下さい。

納　自然は恵まれてはいるけれどそこに生まれたサロン主義などは時代時代に生きてきた人間のつくりだしたものなのです。いずれ、これは崩壊するでしょうし、そうさせねばなりませんね。

黒崎　神戸の街が変わっていくのだから、そこに住む神戸の人たちの環境が変化を生みだしていくことでしょうね。

新谷　活躍の場を神戸以外に求めても、そっぽ向かないで、良い空気を運んでくることによって環境を変える一つの方法だし、私としては、住む土地として一番好きだし、ぜひ変えたいと思いませんが

納　外の空気と内の空気を入れかえることですね。そのためにも、神戸出身の作家が、海外で、東京でどんどん展覧会を開いて空気の交流をよくするパイプになりたいものです。

河口　神戸で一九六五年にグループ位をつくったのですが、これは神戸在住の造型作家たちの集まりで、神戸を拠点にして世界に発展するつもりだったのですが、その時に大阪の連中から、そういうグループが生まれたことが不思議だすぐに壊れるだろう、と言われてまだ壊れてはいないのですが、まわりはそれを不思議に思うのですね。その意味で確かに変わりつつはあるのでしょうが、どうも積極的に変えようとは思わない（笑）

黒崎　芸術にたずさわる者でなく一般の人たちの問題意識が、神戸の場合まだまだ甘いと思いますねこれが次の世代の人たちがでてくるのを押えているとも言える。

河口　自分たちが見たいものを本当に持っていたら、既成の画廊での展覧会を見て、これではつまらない、もっと我々にアピールするものを出してくれと、観客の方から不満がでてきて、どんどん変わっていくと思うのですよ。

黒崎　神戸でやらずに、なぜ東京で個展をするかというと、東京はいろんな人の集合体です。全体の意識が統一されていないから、常に何物かを求めている。非常にストレートなかたちで問題意識がでてくる。ところが神戸は全体にトロリンとしてますからね。

徳永　県立美術館にしても、日本の府県では非常に遅れをとっていますね。北陸の方へ行きますと、十万ぐらいの小さな街でも美術館があって、学生とか一般の人に無料で貸しています。向こうで絵を見にきてくれた人たちは、何か一言を言ってくれるのですが、神戸では見にきても、感情を害せんとこ、と何も言わない。

黒崎　ある時期の人たちが、芸術についてのスタイルをつくりあげてしまって、神戸の人たちは、それにがんじがらめになっているのですよ。それ以外のものを芸術として見ようともしない。それでも神戸にいるのは、神戸が好きなことと、また神戸にいることによって中央のムードからまぬがれていると思うのです。パースペクティブで東京を見ていることで非常に自由でおられるのですね。

納　古いものと新しいものとの均衡は時代と共にかわりますよ。

黒崎　我々のあとの世代は、全く我々と同じ考えを持っているという確信がありますからね（笑）

〈文責・編集部〉

花のある街

もとまちフローラ ジャーナル

〈元町1・2〉

★もとまちフローラ
〝あじさいフェア〟開く

神戸市民の花が〝あじさい〟と決定。元町フローラ（1・2丁目）では、六月二十五日（木）～七月五日までを市民の花決定にちなんで〝あじさいフェア〟を開きます。

六月二十五日は、六甲山高山植物園の北村園長さんを招いて〝六甲と元町を結ぶあじさい交歓会〟を行ない、午後12時30分明治屋前で、六甲山名物のあじさいと元町二つ茶屋の製作したお菓子の〝あじさい〟を、元町レディスが扮した〝あじさい娘〟によって交換するという山と町の親善をしました。

また二十五日からは、元町レディス扮する〝あじさい娘〟六人がミディのドレスで花車を押し1・2丁目間で切り花や植木の花売りをしています。これは元町四丁目の珍花園が協力して市価の約40％安く、女性の人気を集めています。花の好きな人には耳よりなニュース。花のある街〝もとまちフローラ〟にふさわしいこの催しは、人気をよび七月五日まで花売りの〝あじさい娘〟が可愛いい姿を見せます。

★ランチタイムにコンサートはいかが

もとまちフローラタウン、日本楽器・神戸店が、6月からの新企画として〝ヤマハ・ランチタイム・コンサート〟を毎日12～13時までの1時間、4Fホールで開いている。これは、サラリーマン、OLを対象に、昼休みをヤマハのゴージャスなミュージックサロンで、レコード音楽を聞いて憩いのひとときを過ごしてもらおうというもの。入場は無料で、コーラが提供されている。

演奏曲目は、希望者があればレコードの持ち込み、またリクエストにも応じるということです。

詳しくは㉜1191までどうぞ！

★しめて一〇一、〇四五円ナリのたかーい背広上着です！

ミナト神戸はもとまちフローラタウ

札ばりの背広上着

★もとまちフローラショップトピックス

★工芸品の店〈イクシマヤ〉で、夏のモビールを見つけました。種類もハワイの貝がら・扇・蛇の目傘等いろいろ。ルームアクセサリーにいかがでしょう。

六〇〇～一、六五〇円

★いつも若い女性がいっぱいの、レディースショップ〈カワムラ〉に、神戸マップハンカチーフがありました。遠くのお友達に〝ショッピングにおいで〟と手紙にそえて贈ってあげましょう。

一枚、一五〇円

★刃物・家庭用品の店〈菊秀〉にピーター・マックスがデザインしたプレートが飾ってありました。店の奥にも大・中・小と各種そろってます。ガラス製品なので色がすごくきれい。

二、〇〇〇～三、〇〇〇円

★紳士服飾〈ウネ〉でゴルフの絵が素敵な、ふろしき（？）を発見！スカーフにでもテーブルクロスにでも何にでもなりそう。

ピエール・カルダンのネクタイも素敵です。

ふろしき　一万円
ネクタイ　八〇〇円

★〈大上鞄店〉に、携帯用スリッパがあります。厚みがないので旅行には最適！

サック付　一、五〇〇円

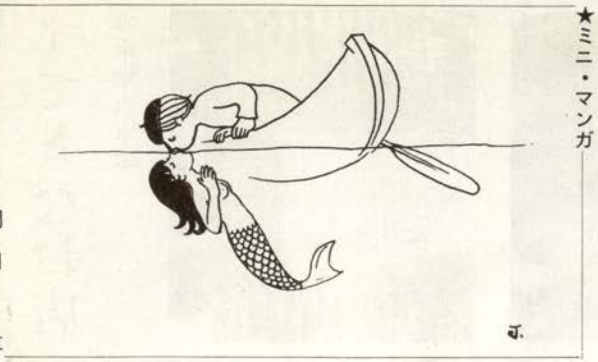
★お酒がずらりと並んだ〈杉本商店〉にサントリーのカクテルセットを見つけました。ミニチュアビンがセットされています。飲むよりも飾っておいて、かわいい感じ

五〇〇円

ン、紳士服飾のエフワンが、PR作戦として千円札の服地五円玉のボタンで作った背広上着をウィンドーに展示。「上着のお値段はしめていくらになるでしょうか。正解者の中から一名様にこの上着を進呈します」というこのアイデア商法、作戦が的中したのかウィンドーの前はいつも黒山の人で賑わっていて、トリオで各自、分担個所を決めて計算するのもいれば、手折り暗算してる人など、その立ち姿はさまざま。一日の応募者数も相当なもので、投票用紙が二日でなくなりあわてて追加注文するという一コマもあった。

このPR大作戦、全国のエフワン直販店が一斉に開いたもので、これから

★ミニ・マンガ



岡田淳

もまた、お客さんの度肝を抜くようなおもしろい企画をたててゆくそうである。ちなみに、この洋服に使われたお金は合計一〇一、〇四五円で、ラッキーな当選者は藤原正文さんでした。

★ユニークな作家が集まる神戸画廊！

現代美術にとりくむ人々の発表の場としてもとまちフローラタウンに、藤田清照氏と杉上喜美子さんによる神戸画廊が再開された。

神戸に新しい息吹をと、企画をねっている画家の喜谷繁暉氏は「街の中の画廊としてすべての人々に見てもらいたいし、自分達の仕事を、考え方を提示して、もう一度人々に考えてもらいたい。枠などまったくありませんのでいろんな方に意欲的な作品なりを発表していただき、神戸市民の画廊として育てていただきたいものです」とおっしゃる。

五月十八日〜二十三日まで開催された〝のんエロティック〟展はセックスをずばり表現した作品ばかり。作者のヒゲ・ニシモト氏は、数年前から、この問題を追及して、今後もずっと続けていくといわれる。自分と見る人との間にワンセクションあって、見る人がはたと考えてくれるか、共感してくれれば幸いと、なかなか意欲的だった。

★元町商店街への車でのお買物には花隈駐車場をご利用ください。

★ベビー用品〈ファミリア〉に、デニムのバックがありました。レモンのついたかわいいバック。チビさんよりもママの方が欲しくなりそうです。　三〇〇円

ジャンセンのカラフルなビキニとお揃いのロングムームーもあります。

ビキニ　一、八〇〇円
ロングムームー　二、二〇〇円

★〈クロージャー・サン・サカエ〉で、いつも変わった品が置いてある所に、ラコステのワンピースがありました。シンプルでちょっとかわいくて、色も白・紺・水色とあります。ボーイフレンドといっしょに、のぞいてみて下さい。

一四、〇〇〇円

★美術品の店〈シンコーギャラリー〉の店先で、ひょうたんで作った色あざやかなギロがありました浜辺へ持って出て、ギターやドラムといっしょにボサノバを演奏してみませんか。　五五〇円

★〈オノ洋装店〉に綿のしぼり染めがありました。きれいな色なのでロングドレスなどラフなドレスをつくってはいかが？

一着分　七、五〇〇円

★万博の記念を残すためにもカメラを買う人が増えています。カメラの〈ヒラマツ〉では新発売のペルウェル三七二GRIP・ケース付をサービス品として置いています。　一三、八〇〇円

★子供の夢をいっぱいそろえている、おもちゃの〈バンブーカメヤ〉にマンガの人気者ニャロメやあー太郎のついたビニールチェアーがありました。プールに浮かして座ってはどうかしら。浮輪のかわりになります。　五五〇円

★〈神戸画廊〉7月のご案内
7・6〜7・12　石原薫個展
7・13〜7・25　民芸一九八〇円
個展のお申し込みは
神戸市生田区元町通2－287
TEL　078(33)8877
画廊使用料は一週間三万円です。

■もとまちフローラ〈モトマチ1・2〉

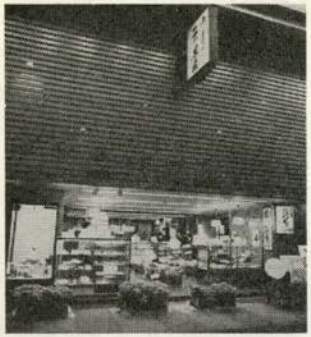
すてきなお店

＊＊＊＊＊＊＊

炳　昌　元町2丁目　㉝1928

★創業は約40年前。昭和21年、元町通りに舶来服地&オーダー専門店としてスタート。

この3月に新装なった明かるい店内には、他店に見られぬ高級舶来服地が豊富にそろっている。高原のやさしい花々の香りを伝えるスイス・フィッシュバーのししゅうもの、華麗な夏の宵を演出するレース生地、繊細な線描きのコットンプリントなど、夏の光の下でさわやかなお洒落心を誘っている



二つ茶屋　元町1丁目　㉝0755

★神戸で数少ない和菓子の名舗。昭和9年の創立に楠寺の住職さんが、街道筋の二つ茶屋村から名を取って命名された。季節感を敏感に折り込み、お客さんに味わっていただきたいという。奥田さんは、神戸っ子でおなじみの菊襲・六甲山・老松葉・新製品のハニィマーフィンなど総合的な菓子づくりに意欲を燃やしている方。二階は喫茶部もあり、和菓子とまっ茶が喜ばれている。

かねてつ　元町1丁目　㉝1641

★フローラタウン東入口山側に、"てっちゃん"で親しまれているかまぼこの"かねてつ"がある。

どこよりもよい製品をモットーに、魚のうまさがそのまま味わえる"味"と、品質にムラがない点で定評があり、関西かまぼこ界のエリートである。店頭コーナーには、目の前で揚げたアツアツのてんぷらを即時販売していて、その出来たてのおいしさが、昼時や退社時の人々に人気を呼んでいる。

★元町うまい店
ポートフラワー
サン・ジュリアン
生田区栄町二丁目十一
TEL㉝9533

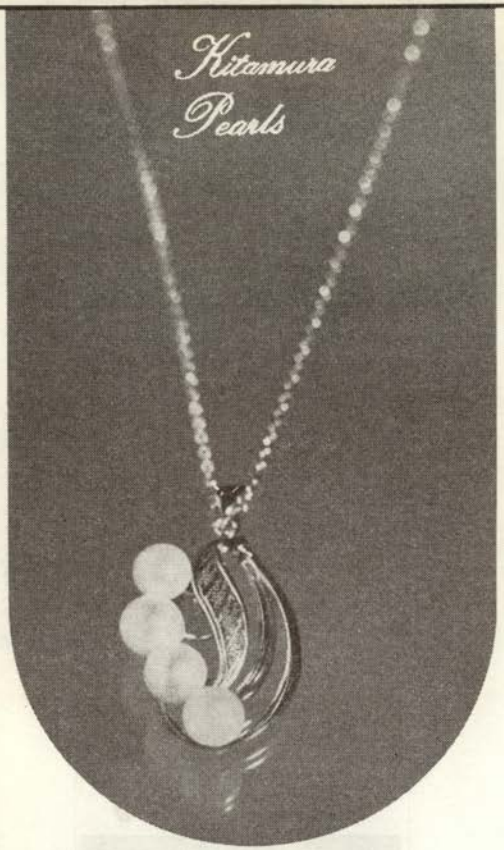
元町二丁目と三丁目の間を南に下った左側、そこが、レストラン・サパークラブ〝サン・ジュリアン〟だ。

サン・ジュリアンとは、フランスのぶどう酒の産地名。この五月二十五日からお店も改装し、清潔で雰囲気を売る店として開店している。夜は7時からバンドの生演奏も聞かせてくれ、ダンスも楽しめる。

「神戸にない新しい何かを創り出して行きたい」とおっしゃるマネージャーの佐伯さん。お得意料理はフランス料理。特にステーキには自信があるそうです。サン・ジュリアンというお酒もあるので味わってみてはいかが。

昼間は近くのサラリーマンで店はいっぱい。ランチタイムは十一時～二時まで。スープ（ポタージュ）。魚のフライ・ハム類・ライスで二五〇円。

＊
ショッピングは
楽しいモトマチへ
＊
98頁～100頁は
元町1・2丁目の
企画ページです
＊



世界の人々に愛される北村パール

★

北村真珠店

元町通2丁目60　TEL 33－0072

EXPO'70

万国博記念ゴーフル

・ゴーフル
¥500

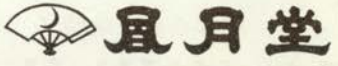
世界のお祭り
万国博のお土産
銘菓ゴーフル

・プロテトーゴーフル
¥500

・ゴーフル
¥300

万博会場内土産品売店
京阪神各百貨店、三番街
さんちか、元町本店にて
販売中

神戸にそだって 70年



元町3丁目　TEL(39)2412－5
さんちかスイーツタウン TEL(39)3455

グット一息さわやかさを飲む！

さわやかな初夏の味をどうぞ！
一品料理も準備いたしております
北欧ヴァイキング料理〈1,400円飲食税140円別〉

飲みほうだい（サントリー純生ビール／クラウン・コーラ）＋食べほうだい

なごやかなムード
すばらしい眺望！

スカイサントリー

三宮交通センタービル9F　TEL.㊴3705～6

〈自然の味〉

純正材料のおいしさがひみつ

ドイツ菓子
Fachheim's
ユーハイム

本　社	三宮生田神社前	TEL(33)1694
三　宮　店	三宮大丸前市電筋	TEL(33)2101
さんちか店	三宮地下街スウィーツタウン内	TEL(39)3539
貿易センタービル店	三宮貿易センタービル地下1階	TEL(25)0139
さんプラザ店	三宮センター街さんプラザ地下1階	TEL(39)1896

さる4月23日から29日まで、一週間、さんちかタウン主催による中村正也写真展、女性美の極地、〝NUDE〟がさんちか広場で催された。写真界の重鎮、中村正也氏は、新聞社、雑誌社のカメラマンを経て、フリーのカメラマンとなった人。絵画的な美意識から、写真独自の芸術行動としてのヌード美学を確立しようという転換期にあって、造形的なヌードから、なまのアクション・エロチズムを追求する写真家の一人として活躍。ニューヨーク・アートディレクターズクラブ賞をはじめ日本写真家批評家協会賞や海外での数々のコンクールで受賞している。個展も20余回に及ぶが神戸での個展は今回が初めて。

その中村正也氏を囲んで、28日金竜閣でささやかなパーティーが開かれた。中村正也氏の古くからの知人であるナショナルファッションの安部社長の世話役で、堀内初太郎、妹尾太郎、緒方しげを氏ら、神戸在住のカメラマンや報道関係の人十数名が出席。

中村正也氏は、ニットのブレザーに縞のシャツで長身をつつむ、おだやかでスマートな中年紳士。

「東京は、学生が多く、ざわついた感じが強い。神戸は、昔からアマチュアカメラマンの水準が高いせいもあってか、画面を見つめる目が違いますね。作品に対する貪欲さというか、一枚一枚じっくりと観賞されます。それだけに、もっと良いものを撮らなければ、いと頭が下がる思いです」と語る。また、神戸の女性に関しては、レンズを通したモデルとしての見方よりも、流行にマッチした、おしゃれ上手な、センスあふれる女性としてほめる。

☆神戸の集いから たえず新しい 作品をもとめて

中村正也氏にきく

現在スターとして活躍する若手カメラマンに関しても、

「写真の歴史そのものがまだ浅くて、派バツの無い世界なんです。すぐれた人が出ると皆で応援しようという気運がある。写真というのは四年もすれば一応の技術はマスター出来る。技術以上のもの、色とか、流行とか感覚的なものが問題なんです。立木とか篠山とかあのバイタリティーは立派ですね。まだまだ若い人がいっぱい出て来ますよ。そういう意味で、写真界というのは、やりがいがあると同時に、きびしさがあります。たえず新しいものを作らなければ。私たちも負けてはいられませんよ」

内に、若いエネルギーを燃やしながら物静かに語る、写真の大家中村正也氏でした。

写真左は金竜閣での集い
右は中村正也氏